

平成三十一年度 高等学校入学試験問題 (HG選抜)

国語

【受験上の注意】

- 一、受験番号、氏名は必ず記入してください。
- 二、解答はすべて解答用紙の所定のところへ記入してください。
- 三、用紙は使いやすいように折ってもかまいませんが、破らないようにしてください。
- 四、解答用紙、問題用紙とも持ち帰らないでください。
- 五、退出の際は、解答用紙を裏にして、その上に問題用紙を置いてください。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

(答えはすべて解答用紙に書きなさい。)

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたくしはずっと、自分の頭にいくらか A B C 目 を覚えて生きてきました。記憶力のよい人がいるからです。もの覚えがよいと学業の成績もよく、頭がよいとされます。それに及ばない自分をずっと恥じていたのです。

学校は知識を教えて、忘れてはいけない、とはつきりは言わないものの、試験をして、覚えていないと減点という罰を加えます。叱られるのはおもしろくありません。勉強し、覚えたことは忘れまいとするのですが、どうもよく覚えられないで、忘れてしまいます。自分で頭が悪いのだときめてしまい、記憶の努力も充分でなくなります。ひそかに記憶のよい人をあこがれるというわけです。エリートは頭のよい人、頭脳明晰めいせきというのは記憶力のよい人、そう思い込むようになります。

そういう考えを疑うようになったきつかけはコンピューターでした。これまで人間にしかできないと思われていたことを、コンピューターはどんどんこなして、人間のお株を奪い始めました。何よりすごいのはこのキカイの記憶力で、人間の記憶など比較になりません。覚えるのも速いし、いったん覚えたことを忘れることがない。キカイがこわれない限り、永久、完全の記憶です。これまで人間に決してできなかったことで

す。人間は記憶していても、すぐ思い出せないことがあります。コンピューターは再生も正確、A 迅速にやっつけてのけます。

記憶①のよいのが優秀な頭脳だとすると、コンピューターは世の秀才よりもはるかにすぐれていることになりました。これはおかしいではないか、とわたくしは考えました。やはり人間はキカイよりも大きな知力をもっていると考えるのがヒューマニズムだと思います。つまり、記憶ということだけで人間を評価するから、人間はキカイに及ばない、などというおかしなことになる、記憶万能は間違っていると考えました。コンピューターは無言でそういうことを教えてくれたように思います。

記憶万能の考えはなにしろ古くからの伝統がありますから、ただ「記憶はダメだ」などと言ってみても何の役にも立ちません。

②人間にできてコンピューターにできないことがあるだろうか、あるとすればそれは何なのか。と考えるまでもなく、「忘却」が浮び上がってきました。コンピューターは記憶は優秀ですが、ただそのまま保持しているだけで変化を与えません。それがよいところなのです。人間はコンピューターと比べるとひどく哀れな能力しかもち合わせていません。どんどん忘れます。

この忘却というところでは、人間はコンピューターの真似まねできない力をもっています。記憶力でコンピューターと競争するのは人間離れしています。いくら非人間的になってもキカイにかなうはありません。

そうだとすれば、人間はキカイのできないところで勝負するほかはない、つまり忘却によって生きるしか手はないことになります。

ところでその忘却ですが、昔から、忘却をよい意味でとらえ、それを評価するということはなかったように思われます。記憶するのが文化創造の原理であるように思われてきました。反対に、記憶を失わせる忘却は悪ものです。悪ものは退治しなくてはなりません。忘却悪はいつしか常識となり、疑う人もありませんでした。

コンピューターの存在する現代には、記憶によって知識を保持することに以前ほどの価値がありません。コンピューターのなかった時代には、不完全な記憶が社会的に有用でしたから、近代の教育は挙げて知識の習得にかかりきりになりました。記憶力絶大なコンピューターがあらわれて記憶の権威はゆらいだはずですが、人はなお、それを認めようとしません。

③それに似たことが、遠い昔にもあつたはずですが、何のことかと言いますと、文字によつてものごとを書き留めることができるようになった文字革命です。④それまで語り部が記憶していたことが、*史部によつて文字に移されました。やはり、記憶絶対の伝統は大きくゆらいだはずでした。文字で記録ができるようになって、記憶の負担はずいぶん軽減されることになり、したがって、B安んじて忘却が許されるようになるはずでした。

ところが、そうはならず、忘却は相変わらず悪もの視され、人間文化の

日陰ものの扱いに変わりがありませんでした。人間の知的文化の歴史の汚点と言つたら、誇張になるでしょうか。

コンピューターの出現は、それ以来の二度目の、記憶の解放、忘却の評価のチャンスというわけです。それなのに、世の賢人たちも手をこまねいているだけです。おかしいではないか、忘却を認知しましょう、さらに忘却をたたえる必要さえある、というのが、わたくしの素朴な主張です。

(中 略)

忘却といつても、人さまざまです。同じように忘れているのではなく、めいめい、自分の基準に合わせて、覚えていたり、忘れていたりするのは、まったく同じ忘れ方をする人間は、この世に二人といたらないと言つてよいでしょう。だれしも、自分の個性に合わせて、覚えていることがあり、忘れることがある。一様に、完全に覚えたり、忘れていたりするのは「人間的」ではありません。

たとえば筆記試験をします。少数ながら満点の答案がありますが、大多数はどこか間違えています。覚えていれば満点になるでしょうが、忘れたことは答えられませんから「誤り」となります。その間違いが个性的です。人によつて異なつたところで間違えるのは、つまり忘れているのです。満点は非个性的ですが、減点されている答案は別々に誤つているのです。忘却のしかたはひとりひとりユニークで、完全に同じ間違い

はないということですが。

八十五点の答案が二つあるとして、もしまったく同じところで間違っているとしたら、二つの答案の間にカンニングがあったことを疑ってみることができません。百点満点の答案は非個人的ですから、カンニングがあっても答案だけからはわかりません。

忘却には、百パーセントということがありません。なんらかの意味で価値のあると思われるところを残し、虫食いのように **I** に忘れていくと言ってもよいでしょう。コンピューターは、百パーセント記憶して、**II** に忘れることはできません。

人間がコンピューターに勝てるのは、この選択的忘却です。どんな大型のコンピューターでも、選択的記憶もできませんし、考えられもしません。

一卵性双生児は、生物学的にはまったく同じであると言つてよいのですが、成長するにつれて、個人差がはつきりするようになります。心理的に違つた経験をしているからで、中でも忘却は重要な個性化の要因と考えられます。同じようにつくられたキカイでも、長い間使つているうちに、固有のクセがあらわれるようにはなりません。

何人かと同じ文章を読ませて、あとでそれを再現させてみると、人によつて、覚えているところと、忘れたところが微妙に違つことがよくわかります。めいめい別々なところにアクセントを置いて記憶し、別々な無意識の網目をくぐらせて忘却しているためでしょう。だいたい記憶は

画一的です。何でも同じように記憶しようとしては、忘れるのはずつと個人的です。めいめいの好み、興味、利害、トクシツ、気分の中からまった忘却スクリーンの間を記憶が通過します。関心に合ったものは、スクリーンのネットにかかつて残り、あとは忘却されます。

同じことを経験し、学習しても、人によつて記憶として残るものが同じでないのは、この忘却スクリーンが個人的なものであるからです。人の個性は、したがって、忘却においてよくあらわれることになります。そして、忘却が記憶と同じように大切であることをわれわれに示しているのです。

知識を記憶するのは、いわば、ものを食べるようなものです。摂取した食べものは胃で消化され、腸で栄養分が吸収されて、あとは残滓として排泄されます。頭に入ってきたさまざまなものも似たように、頭で消化され、吸収されます。その過程自体に実は忘却の大切なはたらきがあります。

もし記憶するだけで忘却がともなわなければ、頭の中が飽和状態になり危険です。⑥ 快便あつての快食です。忘却をないがしろにするのは大きな誤りです。先年からメタボリック症候群ということが言われていますが、忘却しきれない記憶、知識が多くなれば、知的メタボリックです。

自然に忘却するように、人間はできているのです。夜、眠っている間、体は休んでいます。頭は多忙です。昼の間に入ってきたもの、前々か

ら残っているものをいちいち²ギン^シ、分別し、ゴミは捨てる作業をしています。レム睡眠(REM Rapid Eye Movement)間にこの仕分け、整理の忘却活動が進められていると、わたくしは考えています。

レム睡眠はたいいていの人が一晩に三、四回、間を置いて繰り返しているといわれます。一度では済ませられないほど重要だからでしょう。そうしてよけいな、あるいは望ましくないものを処理します。ゴミをすててしまえば頭はきれいになります。それで朝、目ざめると気分爽快、すがすがしい気持ちになるというわけです。

普通なら、それで忘却充分となるところです。ところが、頭に入れた情報、記憶が多くなりすぎますと、この自然忘却だけでは、処理しきれないものが残って、頭に悪い影響を及ぼすおそれが大きくなります。

(外山滋比古 『自分の頭で考える』 中央公論新社)

※史部^{ふひと}：昔、記録・文書をつかさどった役人。

問一、——線1・2のカタカナを漢字に直しなさい。

問二、——線ア・イの漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問三、……線A・Bの語句の文中での意味として、最も適切なものを次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A ひげ目

ア、他に比べて自分が冷静だという意識

イ、他に比べて自分がずるいという意識

ウ、他に比べて自分が古いという意識

エ、他に比べて自分が劣るという意識

オ、他に比べて自分が非協力的だという意識

B 安んじて

ア、心配して

イ、安心して

ウ、恐れて

エ、油断して

オ、落ち着いて

問四、——線①「の」と同じ用法として、最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、奈良の大仏を見学しよう。

イ、君の書いた作文は最高だったよ。
ウ、彼が答えたのが正解です。

エ、これからどこへ行くのですか。
オ、西の空に夕日が沈んでいく。

問五、——線②「人間にできてコンピューターにできないこと」とは何ですか。文中の語句を用いて、十字以内で答えなさい。(句読点や記号を含む場合は、一字に数えます)

問六、——線③「それ」とは具体的にどのようなことですか。文中の語句を用いて、簡潔に説明しなさい。

問七、——線④「それまで語り部がく史部によって文字に移されました」とありますが、これによって成立したものととして、最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、『枕草子』

イ、『平家物語』

ウ、『源氏物語』

エ、『古事記』

オ、『竹取物語』

問八、

I

、

II

に共通して入る語句として、最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、消極的
イ、現実的
ウ、部分的
エ、否定的
オ、理想的

問九、——線⑤「快便あつての快食」とはどのようなことを例えたものですか。簡潔に説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間、年齢を重ねると、若い時には思ってもみなかったような難題にぶち当たる。三浦さんと中村先生のお通夜が重なったことは、東曜子にとって大問題だった。

三浦さん、旧姓末松さんは曜子の高校の同級生で、同じテニス部員でもあったし、卒業してからもずっと連絡を取り合っていた仲良しグループの仲間だから、香典だけですませたくはないのである。

しかし、中村先生に関しては、お通夜と告別式のいずれにも夫とともに参列しなければならないのは、自明だった。中村先生といえば、夫昇平の大親友だったからである。曜子の結婚は見合いだったが、婚約中もつとも早く紹介された友人は中村先生だった。二人とも、掛川東高校を卒業し、静岡大にいっしょに進んだ。教員採用試験も同時に受け、中学の教師になった。赴任先こそ違ったが、同じような仕事人生を歩み、時期をほぼ前後して校長になり、退職校長会だつていっしょに入った中村先生が亡くなったのだから、夫の東昇平が葬儀に出ないことはありえなかった。

ただし問題は、夫がアルツハイマー型認知症をア患つていて、一人では通夜の場合にたどり着けない、という事実だった。

大黒柱同士が親友だった東家と中村家は、家族ぐるみで旅行をしたこともある。子供たちも小さい頃はよくいっしょに遊んだものだ。だから、娘たちも中村先生にはお別れを言うべきである、という結論を、曜子は導き出した。

「どつちでもいいの。お通夜か告別式か、どちらか行つてちょうだい」
曜子は次女の菜奈に電話をかけてそう言った。

長女の茉莉は連れ合いの赴任でまだアメリカにいたし、三女の美美は

いつも仕事で忙しそうで、声をかけるたび邪険にされる。メーカー勤務の夫と小学生の息子がいる次女は、曜子が比較的使いやすい娘なのだった。

「告別式の日はわたし、将太の塾の先生と面談があるの。お通夜に行くわ。将太は八時まで塾だから、パパに早めに帰ってもらおう」

菜奈は答えた。

中村先生のことは、菜奈もよく覚えている。正月になると、中村先生はよく東家に遊びに来た。

数年前に、たまたま菜奈が実家に一人で帰った日、中村先生は父の昇平を訪ねてやってきた。あのころまだ昇平は認知症を発症していなかったし、中村先生の大腸がんも見つかっていなかった。二人ともとつと校長職を退いていて、その後に就いた図書館長だのなんなの、教師を立派に定年まで勤め上げた者に回ってくる名誉職も辞した後だった。

菜奈がお茶を淹れて客間に入ると、二人は大音量で掛川東高校の校歌を聞いていた。

「歌はいいなあ」

と、中村先生は言った。

「心を豊かにする」

と、東昇平が応じたのも忘れがたい。

それからひとくさり、高校時代の思い出話に興じ、それから二人の退職校長は軽佻浮薄な昨今のあれこれを嘆き、最後にインターネットの

悪口を言った。あんなものを使う人間の気が知れない、というのだ。

「ウィキペディアなんて、誰が書いてるのかもわからんものを、信用できるかっつてんだ」

中村先生は鼻から煙を吐きそうな勢いで言った。

「ああいうものはみんな、エンサイクロペディアなんか引いたこともないような馬鹿が頼るんだ」

東昇平は、丸ごと同意するという意志を表明するために、深く何度もうなずいた。そして二人はもう一度掛川東の校歌を聞き、曜子が用意した酒とつまみで楽しそうに酔っ払った。あのころはまだ二人とも、①いまだときの風潮に腹を立てて気焰きえんをあげられるくらいには若かったのだった。

わからないことがあれば百科事典を引いた世代が、また一人逝いつたのだわ、と菜奈は思った。

「お父さん、がっかりしちやってる？」

菜奈は母親に訊ねた。

「うーん」

曜子は長く引つ張る微妙な返事をした。

実のところ、夫がどう思っているのか、わからなかったのだ。

東昇平は喪服を着た妻といっしょに家を出た。

もちろん、自らも喪服を着て黒いネクタイを締めていた。最寄駅に

は、黒いワンピース姿の菜奈がいた。妻はホームの反対側に入ってきた電車に乗ってどこかへ去り、昇平は娘と二人になった。娘にイ働いこされるままに、何度か電車を乗り換えて、私鉄の駅を出た。日はすでに西に落ち、駅から数分の距離のセレモニーホールの入口に、中村家と書かれた提灯ちようちんがともっていた。

②通夜の席では、昇平はまったく動揺を見せなかった。

娘といっしょに焼香に立ち、遺影に手を合わせて深々と礼をした。

「よくいらしてくださいました」

と、腫れぼったい目をした中村先生の奥さんが言った。

「このたびはほんとうにご愁傷さまです」

娘の菜奈がそう言つて頭を下げるのに合わせて、昇平も沈痛な面持ちで目礼をした。

「東先生がいらしてくださいまして、夫は喜んでいと思います」

中村先生の奥さんは声を「フル」わせた。

「こんなことになるとはなあ」

昇平はそう口に出した。菜奈は少し不思議な気持ちで父を振り返ったが、友の遺影と遺体を目の当たりにした昇平が事の次第を理解したようにも感じられた。

棺の置かれたホールの二階に、通夜振る舞いの席が用意されていた。早めに席についていた年配の男性が二人、昇平に向かって手を上げた。

「東！」

男性の一人が声をかけた。昇平も軽く敬礼をするような手つきを返した。

「お嬢さんですか」

もう一人の男性が菜奈に声をかけた。

「次女の菜奈です。父がお世話になっております」

「静岡大学でいっしょだったハギワラです。こちらがマツモト」

「存じ上げております。父から、よく話を聞いておりましたので」

「おおお！ 久しぶりだなあ」

昇平は嬉しそうに声を上げた。

それは、多少は通夜にそぐわない明るさであったかもしれないが、

²キョウウレツな違和感を人々に与えるほどの奇妙さではなかったし、

同窓生である旧友二人も再会に心を和ませて笑顔になり、

「やあ、久しぶりだよ、まったく、このごろじゃ、こんなことでもなき

やあ、こいつが仙台からわざわざ出てこないもんなあ」

ハギワラ氏がマツモト氏をつついたりした。

菜奈と昇平は二人の男性の向かい側に座った。気を利かして菜奈がピ

ールを注いだ。マツモト氏は一杯目を一気に飲み干すと、昇平に向かっ

て言った。

「まったくいやになっちゃうなあ。我々の同期もこうしてどんどん死ん

じゃう。残される者はたまらん」

昇平の目はみるみる丸くなった。

「え？ 誰か死んじゃったのか？」

大きな声で昇平は言った。ハギワラ氏とマツモト氏の目は泳いだ。

菜奈は何か発言してその場を取り繕うべきかどうか一瞬考えた。母は父の病状について、父の友人や元同僚たちにどこまで話しているのだろう、と菜奈は思いを巡らせる。

父が中村先生の死去に気づいていない、あるいは死去に気づいた直後、忘れてしまった、もしくは死去そのものを理解しないでいる、その三つの可能性が菜奈の頭に浮かんだが、何をどう言ったらいいかわからなかったため、とりあえず目の前の握り寿司を頬張って聞こえない振りをした。

その間、ハギワラ氏とマツモト氏も、それぞれ旧友東昇平の発言の意味を考えていたが、仲間内で最も切れ者であった東が、たったいま遺体を確認した同級生の死を知らないとは思えなかったため、発言の真意は別にあるのだろうと解釈した。

「だから、あれだよ」

マツモト氏は続けた。

「ハシダが去年の夏だったろう。ムラマツが一昨年から」

「シマモトさんも今年だろ。一級上の」

東昇平の「I」発言を、「II」という意

味だと強引に解釈したハギワラ氏とマツモト氏は、不景気にも死んだ同窓生を数え始めた。東昇平はいちいち驚いていたが、それでも三人の

話がかみ合っていないわけではないわけではなかった。

「ところで」

と、一通り教え終わったところでハギワラ氏が切り出した。

「明日の告別式なんだが、友人代表で誰か弔辞ちようじを読んでくれと、さっき奥さんに頼まれたんだ」

「そら、東だろ。俺はダメだ。今日中に仙台へ帰らなきゃならない」

「僕も東が適任と思う。中村とはいちばん仲が良かったし、なにしろ東はそういうのが得意だからな」

「じゃあ、東、頼む」

「ああ」

「あほう」

恐る恐る、菜奈は口を挟んだ。

「父はこのごろ、体調が思わしくないので、弔辞は萩原先生にお願いできましたらと」

「なに？ 体の具合が悪いのか。明日は来られないんですか」

「いえ、あの、母といっしょに来ることは来るのですが」

「それじゃあ、やっぱり東だ。僕らとは比べものにならない。あなたは知らんだろうが、東はスピーチが得意なんですよ。校長時代に朝礼で鍛えてますからね」

「それなら萩原先生だって」

「いや、僕なんか、長すぎちゃって、暑い盛りには必ず卒倒する生徒が

出たもんです。僕にやらせちゃいかん。その点、東は生徒にもウケがよかったからなあ」

「そりゃもう、東がいい。東で決まりだ」

「実は父はこのごろ少し、物忘れが進んできていて、スピーチなんかはちよつともう、無理じゃないかと思うんです」

「だいじょうぶですよ。東のスピーチは、即興ですからね。3ゲンコウ3もなし、暗記もなし」

「中村の葬儀に東が来てるのに、他のヤツが弔辞を読むなんてのは、おかしいや」

「まあ、そう言うなら、俺がやるしかないかな」

東昇平は少しばかり胸を張った。

③菜奈は父に非難の視線を送ったが、満面に笑みを浮かべた昇平はまったくB意Bに介介ささななががつつたた。マツモト氏が言った。

「頼むよ。中村のことはおまえがいちばんよく知ってるからな」

「あたりまえだ。ところで、中村はどうした？」

昇平は大きな声で言った。ハギワラ氏とマツモト氏の目は再び泳いだ。

ほらね、言わんこっちゃない。菜奈は腹の中で独り言を言った。お父さんは中村先生が死んだってことがわかってないのよ。これでとうとう父の旧友たちも、東昇平の病状を見てとって、弔辞を読ませるのをあきらめてくれるだろうと菜奈は思った。

その間、ハギワラ氏とマツモト氏も、もう一度、それぞれ旧友東昇平

の発言の意味を考えた。しかし、仲間内で最も切れ者であった東が、たったいま遺体を確認した同級生の死を理解していないとは、ますます考え難かったので、やはりどうしても、発言の真意は別にあるのだろうと解釈することにした。

「だから、あれだよ」

マツモト氏は続けた。

「ずっとほら、大腸がんで、人工肛門つけたりなんか、してたる。もうずいぶんになるよ」

「あれが肝臓に転移しちゃったんだ。それが相当悪くって、手遅れになったんだ」

東昇平の [III] 発言は、 [IV] という意味

ではなく、 [V] という意味だと強引に解釈された。ハギ

ワラ氏とマツモト氏は、昇平がとうぜん知っていてもいい大腸がんのウ顛末を語りだした。東昇平はいちいち驚いていたが、それでも三人の話がかみ合っていないわけではなかった。

「あとう、萩原先生。やっぱり、父に弔辞は難しいと思うんですが」

菜奈は話に割って入って蒸し返した。告別式で父が思いつきりとなんかんスピーチをする姿を想像するとおそろしかった。なにがなんでもやめさせなければ、と菜奈は思った。

「いや、難しいことは考えなくともいいんです」

「二人は掛東以来の親友だからねえ。東以外に、やれる人はおらんよ」

「でも、父にはできないと思います」

「そんなことはありませんよ」

「中村が死んだつてのに、東が弔辞を読まないんじや、話にならん」

マツモト氏がそう言ったとたんに、東昇平は素っ頓狂な声を上げた。

「何？」 [VI]

ハギワラ氏とマツモト氏の目は再度泳ぎ、定まることがなかった。そして今度こそ、東昇平の発言を楽天的に解釈しなおすことは、年を取ってやや頑固になってきた旧友たちの想像力をもってしても不可能だった。ハギワラ氏は岩のごとく固まって中空を睨みつけ、マツモト氏は手酌でビールをあおった。

「ハギワラ、おまえ、明日、弔辞読め」

マツモト氏が言い、④悔しそうに目を瞑った。

「ああ」

ハギワラ氏は怒ったように続けた。

「死んだこともわからないんじや、弔辞は無理だ」

(中島京子 『長いお別れ』 文藝春秋)

問一、——線1く3のカタカナを漢字に直しなさい。

問二、——線ア、ウの漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問三、……線A・Bの語句の文中での意味として、最も適切なものを次のア、オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 自明

- ア、責任が重大であること
- イ、差しさわりがあること
- ウ、自分で決めていること
- エ、分かりきっていること
- オ、自然の流れであること

B 意に介さなかった

- ア、気がのらなかった
- イ、気後れしなかった
- ウ、気を配らなかった
- エ、気にとめなかった
- オ、気に入らなかった

問四、——線①「いまどきの風潮」とありますが、これに具体的にあってはまるものを次のア、オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、百科事典

イ、図書館

ウ、ウィキペディア

エ、エンサイクロペディア

オ、インターネット

問五、——線②「通夜の席では、昇平はまったく動揺を見せなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由を三十字以内で説明しなさい。(句読点や記号を含む場合は一字に数えます)

問六、

I VI

には、どのような言葉が入りますか。最も

適切なものを次のア、カの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度答えてはいけません。

ア、中村の他に誰か死んじゃったのか

イ、中村はどうした?

ウ、中村の死因はなんだったのか?

エ、誰か死んじゃったのか

オ、中村はどうしてここにいないんだ?

カ、中村、死んじゃったのか?

問七、——線③「菜奈は父に非難の視線を送った」とありますが、それはなぜですか。その理由を四十字以内で説明しなさい。(句読点や記号を含む場合は、一字に数えます)

問八、——線④「悔しそうに目を瞑った」とありますが、この時の「マツモト氏」の気持ちの説明として、最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、平身低頭で昇平に弔辞を頼んだのにも関わらず、娘の菜奈が、昇平が弔辞を引き受けることを最後まで良しとしてくれなかったといううことにやるせなさを感じている。

イ、病気のせいで昇平が中村の死を理解できていないのだということにに気付き、切れ者だった昇平が衰えてしまったことにやるせなさを感じている。

ウ、昇平の病気のことは以前から知っていたが、中村の死をまったくわかっていない姿を目の当たりにして、自分たちが老いてしまったたことにやるせなさを感じている。

エ、歳をとった昇平が、昔の気さくな感じがなくなり、中村の死や自分の老いすら認められないような頑固者になってしまったたということにやるせなさを感じている。

オ、弔辞を読むのは話がうまい昇平が適任だと思っていたのに、結局

任せることができずに、話するのが苦手な自分がその任を押し付けられたたことにやるせなさを感じている。

問九、この文章の表現の特徴として最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、父の旧友たちの名字をカタカナで表記することによって、告別式でで会う人間の持つ無機質な雰囲気を巧みに表現している。

イ、「昇平」と表記されている時はいかにも病人という姿が見られるが、旧友の前では「東昇平」と表記され、健康的な様子に変化している。

ウ、東曜子から始まった物語の視点は、話が進むにつれて、娘の菜奈や語り手など、場面に応じて変化している。

エ、認知症である父の症状に苦しむ妻や娘の悲痛な気持ち、現在と過去を交互に織り交ぜて進む話の構成によって表されている。

オ、父の発言に対して「ハギワラ氏」達がしきりに目を泳がせている姿は、旧友たちが最初から父を疑っていることを暗示している。

